和して同ぜず

あいおいニッセイ同和損害保険社長　新納啓介（にいろ　けいすけ）

協調性を重んじる日本人にとって、周囲と良好な関係を築く「和」の精神は理解しやすいだろう。一方「同ぜず」、つまり安易に同調しないことはなかなか難しい。私もそのはざまで悩んだ一人だ。

小学生の頃、父の転勤に伴いロンドンに移住した。英語が話せないまま転入したため会話が出来ず、さらに人種差別のいじめにもあった。戸惑うばかりだったが、悩んだ末に私は何事も体当たりで挑むことで解決した。サッカーでは体格差のある相手にも果敢に立ち向かい、時にはけんかもした。彼らのルールの中に飛び込み、国籍は違えど同じ人間であると示したことで、徐々に認められていった。へりくだり、迎合することなく、自らを主張したことで受容されたという体験は、幼いながらも自信につながったと思う。

数年後、帰国が決まった。久しぶりの祖国に心を弾ませたのもつかの間、あまりにも授業が退屈で驚いてしまった。ロンドンでは皆が競うように発言し授業に参加していたが、日本では私以外誰も発言しない。一様に下を向き黙って聞くのが日本の文化。「間違ってもいいから発言する」――そのようなロンドンの空気は日本になく、悶々とした日々を過ごしていた。

転機があったのは大学生の頃。とある授業で「和して同ぜず」の言葉に触れた。協調は大切だが、自らの考えなく無責任に同調するべきではない。この言葉に出会ったとき、かつてもがきながら得た主体性を肯定してくれるように感じた。

入社後は、この言葉を自分の軸とした。当社は当時、売り上げの多くはまだまだ国内の会社であったが、選抜で海外留学を勝ち取った。海外駐在時には子会社の事業を大胆に見直し、ローカルのスタッフと共に汗を流したほか、交渉では意見をはっきりと表明し、相互の理解を築いてきた。「和」するために、安易に「同」しないことが大切なのだ。

社長就任に伴い、英国、欧州、米国、アジアなど海外拠点を訪問する中で、「和して同ぜず」の意味を聞かれることがある。先日訪問したオーストラリアでは、私が言葉の意味を解説すると現地の取引先から握手を求められた。その言葉はD&I(Diversity and Inclusion)に通じており、今まさに必要な考え方だと一致した。熱を帯びたその瞳に、改めてこの言葉の意義を感じた。

「和して同ぜず」。この言葉は「論語」が起源とも言われており、およそ2500年を経た今でも決して色あせることがない。国境を超え、時代に呼応して変化し新たな価値を生み出してくれるこの言葉とともに、今後も過ごしていきたい。